

平成30年6月24日現在

機関番号：33302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12901

研究課題名（和文）日本語教育プログラム論構築のための基礎研究

研究課題名（英文）A Basic Research on Constructing a Theory of Program in Japanese Language Education

研究代表者

札幌 寛子（FUDANO, Hiroko）

金沢工業大学・基礎教育部・教授

研究者番号：20229090

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会とのつながりがますます重要となっている日本語教育の教師養成課程や主任研修で、個々の教師らが自らの担当コースと所属組織の掲げる使命や目標との関連を理解し、プログラムを俯瞰できるツールとして「言語教育可視化テンプレート」を開発した。これを様々なワークショップなどで、実際に日本語教育関係者に記入してもらい、その利用価値や修正点についての声を集めた。またテンプレート開発と並行して、日本語教育活動をプログラムレベルで大局的に捉え、その開発・運営・評価・改善に関する情報共有や問題発見・解決ができる議論の「場」としての「日本語教育プログラム論」構築の必要性を訴えた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed “the Program Description Template in Language Education” in order for Japanese language teachers in the teacher/manager training sessions to understand the relationships between the courses they teach and the missions, goals, components, curriculum, etc., of the program to which they belong. Having asked Japanese teachers to fill in this template in several workshops, we confirmed its value and collected some suggestions for improvement. Along with this template, we appealed the need to construct a theory of program in Japanese language education, with which we can discuss various topics related to the development, management, evaluation and improvement of Japanese language programs.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育プログラム論 言語教育可視化テンプレート 社会的使命 日本語教員養成 プログラム開発・運営・評価・改善

1. 研究開始当初の背景

筆者らは、2005年から、言語教育プログラムの運営方法や評価について文献購読などを行い、日本語教育プログラムの在り方について議論する研究会活動を行っている。そこでの議論から、次第に日本語教育界全体でプログラムレベルでの議論ができる仕組み、あるいは「場」として、「日本語教育プログラム論」の構築が必要だと考えに至った。

このような仕組み、あるいは「場」が必要だと考える理由は二つある。

一つは、これまでの日本語教員養成カリキュラムでは、コースデザインは必修項目となっているが、いくつかのコースを包括するプログラムや当該学習組織に課されている社会的使命と、そこでのカリキュラムや各コースとの関連などについての学習は求められていないからである¹⁾。そのために、日本語教師の中には、自らが所属する組織やプログラムの使命を認識することなく、また担当するコース/授業のカリキュラム上での位置づけや達成すべき目標なども十全に理解しないまま、毎回の授業をどう行うかのみに腐心する教師も見受けられる。この問題を解決するためには、やはり養成段階から、担当するコース/授業をプログラムレベルで俯瞰できるような指導が必要だと考える。

もう一つの理由は、多くの日本語教育組織において、本来の専門は日本語学や言語学、言語教授法などの日本語教師が、中堅以上になって特段の研修もないまま、個人の経験知や各組織の「やり方」に則って、主任などの立場でプログラムの運営・管理業務を担当することが多いからである。かつ、各組織で培われた運営・管理のノウハウは類似機関どうしで共有されることは少なく、日本語教育界全体での質の向上にはつながっていないからである。

そこで、筆者らは、養成段階から日本語教師が自身の関わるプログラムの使命や担当コースの位置づけを理解するために、そしてプログラム運営・管理責任者が自らのプログラムの現状を俯瞰したり、類似機関と比較したりして問題を発見・改善へとつなぐために、まずプログラムの全体像や現状を可視化できるツールがあると有用ではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、申請の時点で以下の3点を研究の目的として掲げた。

(1) 日本語教育プログラムについて議論ができる枠組みを構築するために、議論の土台として、日本語教育プログラムの実像と特性を多面的(例:組織構造、カリキュラム構成、運営の流れ)に記述・描写した事例を集め、標準的なモデルを抽出する。

(2) (1)の事例を参考に、白地図のような汎用的ひな形と記述項目欄からなるワークシートを作成し、研修会などで用いて個々の日本

語教師に自分の関わるプログラムの様子を描いてもらい、その実用性を明らかにする。
(3) 関係学会でパネルディスカッションや研究発表を行い、プログラムの観点からの日本語教育活動理解の必要性を訴える。

ただし、活動を始めてみると、(1)で計画した実際の教育プログラムを記述・描写してから帰納的に標準的モデル抽出することはかなり時間を要するよう思われたため、研究メンバーの知識・経験を踏まえて、日本語教育プログラム像を描くのに必要なプログラムの構成要素は何か、どのような枠組みで記述すればよいかについて、演繹的に議論・検討することとなった。そして「言語教育プログラム可視化テンプレート」(以下「テンプレート」と略)の開発を目指した。(2)(3)については、ほぼ当初の計画の通り実施した。

3. 研究の方法

まず最初にテンプレートを開発した。このテンプレートは、上述のように、日本語教員養成講座や教師研修の場での学習ツールとして、日本語教育関係者らに、自らが関わるコース/授業と所属組織に課せられた使命・掲げる目標などとの関連を考えるように促すことを用途の一つに想定している。

もう一つの用途には、このテンプレートは現状記述のほかに、理想像を描くということも可能だと考えられるので、それらを比較することによって現状の問題発見から解決へと導くツールとしての利用がある。さらに、複数機関の日本語教育関係者でそのような比較検討を行うことができるようになれば、正に日本語教育プログラム論としての議論の「場」を作り出すツールとしても利用可能であろう。

テンプレートの形は、研究期間内に何回か修正を重ね、かつ使用目的に合わせて用いる用語などを変えてはいるが、どれも基本的に大きく分けて4つのエリア、「社会的背景」、「構成要素」、「基本計画」、「実施活動」で構成される。「社会背景」には、背景のほかに当該プログラム・組織が掲げる使命や目標、実績などの項目が含まれる。「構成要素」はヒト・モノ・カネ・情報から成り、それらが教育・支援スタッフ、運営スタッフなどの項目に細分化される。「基本計画」は、カリキュラムやシラバスに関わる項目である。そして、「実施活動」では、当該プログラムあるいは組織のPlan(計画・準備)-Do(実施)-Check(モニター・評価・振り返り)-Act(フィードバック・見直し・改善)サイクルの各フェーズの在り様を記述する。このテンプレートは、筆者らが関わる言語教育プログラム研究会のHPで、いくつかの記述事例と共に公開している²⁾。

テンプレートの開発の後、この記述を行うワークショップなどを開催し、利用者からの意見を求め、改良していった。

4. 研究成果

<対外的活動>

本研究では、平成 27 (2015) 年度からのテンプレートの開発を軸に以下のような活動に取り組んだ。

まずは、最初に開発したテンプレート (Version 1.3) について、**2015 年度日本語教育学会秋季大会** (沖縄国際大学、2015 年 10 月 11 日) にて**ポスター発表** (札野他 2015) を行った。ここでは、テンプレートの記述を通してプログラムの全体像を把握・理解することの重要性を訴え、当日の参加者から多くの賛同を得た。ただし、Excel の何層にもなったシートの構造については、記入作業の大きな負荷が指摘された。

その後、このポスター発表を見た古川嘉子が、筆者らの研究会に加入し、また自らが担当している**国際交流基金海外派遣専門家への事前研修** (2016 年 1 月) にて、先のテンプレートを研修目的に合わせてカスタマイズしたバージョンのものを利用した。

平成 28 (2016) 年度は、テンプレートの改善、特に記入作業の簡素化に向けた修正を行った。そして日本語教育関係者有志を対象として実際にテンプレートに記入してもらい、その有用性や問題点などについて意見を聞く機会を持つために、**日本語教育学会 2016 年度実践研究フォーラム** (東京外国語大学、2016 年 8 月 7 日) にて「**体験型セッション**」を実施した (徳永他 2016)。参加者は 31 名で、国内外の大学教員 (常勤、非常勤) が半数以上を占めた。セッションでの参加者アンケートから、「テンプレートを書いただけでは改善点が見えてこない。これを使ってコミュニケーションをするプロセスが必要」との声が聞かれ、記述されたテンプレートを対話のツールとして活用することの重要性への賛同を得た。

続いて 12 月には、日本語教育有識者として、神吉宇一氏 (武蔵野大学大学院言語文化研究科 准教授、公益社団法人日本語教育学会 副会長) と品田潤子氏 (公益社団法人国際日本語普及協会所属教師、ビジネスプロセスコミュニケーション研修サービス代表) を筆者らの研究会 (言語教育プログラム研究会) 例会にゲストとしてお招きし、テンプレートの今後の活用方法に関してメンバーと意見交換をする**討論会**を開催したⁱⁱⁱ。ゲストの二人から、テンプレートの有用性とプログラムレベルから日本語教育活動を捉えることの重要性について理解と賛同を得ることができた。

翌年 2 月には、言語教育プログラム研究会主催、立命館大学日本語教育センター共催で、**公開ワークショップ「自身の関わる日本語教育プログラム像を描いてみよう プログラム可視化テンプレート試用版を用いて in 関西」** (立命館大学、平成 29 年 2 月 25 日) を開催した。参加者は、10 名弱と限られてはいたが、プログラムの全体像を捉えるために

有用だとの反応を得た。ただし、まだ、記入量の多さを負担に感じるとの指摘があった。

最終年度の平成 29 (2017) 年度には、活動の総仕上げとして**日本語教育学会春季大会** (早稲田大学、平成 29 年 5 月 20 日) にて、「**『日本語教育プログラム論』構築に向けての提案**」というタイトルで鈴木秀明・大河原尚・札野寛子が**パネルセッション**発表を行った (鈴木他 2017)。ここでは、鈴木が「日本語教育におけるプログラムの視点の重要性」、大河原が「日本語教育プログラムの運営における対話のための『道具』と議論の『場』の必要性」、札野が「『日本語教育プログラム論』の提案」について論じた。最後の質疑応答では、経営学の背景を持つ参加者から、用語の使い方が曖昧であり、はっきりと定義すべきとの助言を得た。

同年 10 月には、中河和子・大河原尚・松尾憲暁他による、**地域での日本語教育活動関係者を中心としたテンプレート紹介のワークショップ「地域日本語教育可視化の試み」** (名古屋大学、平成 29 年 10 月 8 日) を開催した。この回の対象者は、システムコーディネータと呼ばれる、地域日本語教育をデザインし行政と地域住民の協働事業の推進役を務める人々と、日本語コーディネータと呼ばれる日本語支援や交流活動を専門家として運営・維持する役目の人々、20 名程度であった。終了後のアンケートでは、暗黙知が可視化できる、他のメンバーと理念・事業全体の関わる要因などを書面で共有できる、新規立ち上げまたは見直し・新任者への引継ぎ・研修に活用できる、事業評価に活用できるなどの理由で全参加者から「テンプレート記述は、自分が携わっている地域日本語教育/事業について理解するのに役に立った」との反応を得た。一方、問題点として、「量が多く記入作業が大変/テンプレート記入後、行政など多様な関係者が自身の業務関連に直接使えるような工夫がないと記述する動機が薄まる/言語教育的な用語が多いので、行政関係者には書きにくい場合がある/地域の場合、問題のある教室は元々このような記述に慣れていない、または書いても「気づき」ができない人が多いので、内省活動も合わせた工夫が必要/このテンプレートはアカデミックなプログラムが前提とされている感じが、制度化されていない地域日本語教育に起こる事柄を記入しにくいなどの指摘があった。

同じく 10 月には、鈴木秀明・古川嘉子による、**ビジネス日本語研究会** (漢検漢字ミュージアム (京都市)、平成 29 年 10 月 28 日) での「**プログラム共有のためのテンプレートを探る**」という題目での**講演**と**ワークショップ**が行われた。ここには、大学、日本語学校、地域、海外機関などの幅広い層約 30 名が参加した。ここでも、テンプレートの有用性は理解されたが、一方で「使命」から始めるより教員や学生数など事実から記入する方が

書きやすい、立場によって記入できない項目はどうすればよいかなどの声が聴かれた。

また、年度末3月には、徳永あかね・小池亜子・中河和子が、**ボランティア団体「ふくおか地域日本語の会」主催の研修会**（ボランティア交流センターあすみん（福岡市）、平成30年3月17日）にて、「**自分の関わる日本語支援活動を可視化しよう！**」というタイトルで3時間の講演を行った。講演では、プログラムの視点で自分が関わっている日本語支援活動を捉え直す意義を伝えることを目的として、まず、「プログラムとは何か」の定義を身近な例で伝え、プログラムの使命、基本計画、資源などを本科研で開発した図で示した。次いで、児童生徒の日本語支援現場での改善例、地域の日本語対話活動開発例を使い、プログラムの視点で問題を捉え直す方法について受講者とやりとりしながら講演を進めた。当日は、福岡圏内でボランティアとして日本語を教えている人たちを中心に約35名が受講した。最後に行ったアンケート調査から、日頃の日本語支援活動をプログラムの視点で捉えることの意義が伝わった様子が窺えた。

<成果>

本研究では、プログラムがどのような構成要素から成り立ち、どのような枠組みを持っているか、それをどのように記述できるかという検討を重ね、テンプレートというツールを開発できた。そして、多様な日本語教育関係者（地域、ビジネス、大学、海外派遣専門家研修など）に実際に記入してもらい、書きにくいところを修正したり、用途に応じてカスタマイズ版を作ったりしており、現在も改良を重ねている。これらは、前述Ⅱのサイトで公開している。またこれまでのワークショップなどで得られた記入例から公開への了解を得たものについても、記入事例として紹介している。

さらに筆者らは、このテンプレートをどのように使えるかという切り口から、日本語教育関係者に大局的な視点から俯瞰的にプログラム活動を捉えることの重要性、そしてプログラムレベルでの議論をする「場」として日本語教育プログラム論の枠組み構築の必要性を主張してきた。これについては、日本語教育関係者からかなりの賛同を得たと確信している。特に、平成30年3月に公開された「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」で、「言語教育法・実習」区分の必須の教育内容として「(21)日本語教育プログラムの理解と実践」が追加されたことや、研修内容にプログラムデザインやマネジメントに関する項目が加えられたことから、我々の主張が社会的に認知され始めたと考えたい。

<今後の展望>

テンプレートは、まだ改良の余地があるの

でその作業を継続する。特に、地域での日本語支援活動関係者から、テンプレートで使用する用語の使い方の曖昧さ（例：教師か、指導者か、日本語専門家か）などの指摘を受けているので、今後もより一層使いやすい形への改良に努めたい。

またテンプレートを利用して、社会のニーズに応えたより効果的な日本語教育活動を実現するために、プログラムレベルでの議論の啓蒙活動や研修を継続して行っていきたい。そのために、現在筆者らは、本研究の成果を元に、今後教師養成あるいは中堅・主任研修などで参考書として利用してもらえるような図書の執筆にとりかかっている。ただし、筆者らの多くは大学関係者であるので、大学以外の日本語学校や地域での取り組み、あるいは年少者日本語教育活動などの分野の関係者から情報を得て、それらの分野での現状理解を深める必要がある。また、日本語教育プログラムの運営・管理に関しては、日本語教育界であまり情報やノウハウが共有されておらず、これまでの知見もまだ整理されていないので、まずは身近な組織での事例を記述することから始めたい。その一方で、超党派国会議員から成る日本語教育推進議員連盟による「日本語教育推進基本法案（仮称）」に関する議論や、日本語学校でのISO29991認証評価のような教育組織の質保証制度の導入などの新たな動きもある。このような日本語教育界を取り巻く現状に目を配りながら、日本語教育プログラムの在り方について有意義な議論ができる場の構築にさらに貢献していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

1. 鈴木秀明・大河原尚・札野寛子（共同研究者：遠藤藍子、小池亜子、菅谷有子、田中和美、徳永あかね、中河和子、古川嘉子、ボイクマン総子、松下達彦）「『日本語教育プログラム論』構築に向けての提案」2017年度日本語教育学会春季大会予稿集 査読有 <http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/12/2017-spring.pdf>
2. 徳永あかね・大河原尚・遠藤藍子・小池亜子・菅谷有子・田中和美・中河和子・札野寛子・ボイクマン総子・松下達彦・古川嘉子（コーディネーター：鈴木秀明・中川健司）「自分の関わる日本語教育プログラム像を描いてみよう—プログラム可視化テンプレート試用版を用いて—」2016年WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』査読有 http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2016/12/2016_SGtokunaga.pdf
3. 札野寛子・松下達彦・大河原尚・遠藤藍子・小池亜子・菅谷有子・鈴木秀明・田中和美・徳永あかね・ボイクマン総子「日本語教育プログラム可視化テンプレート開発—プログラム構成要素と記述枠組みの検討—」（2015年度日本語教育学会秋季大会予稿集、pp. 367-368、査読有）

〔その他〕

ホームページ等

http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/project/Pro_Ken/index.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

札野 寛子 (FUDANO, Hiroko)
金沢工業大学・基礎教育部・教授
研究者番号：20229090

(2)研究分担者

松下 達彦 (MATSUSHITA, Tatsuhiko)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：00255259

(3)研究分担者

大河原 尚 (OKAWARA, Hisashi)
大東文化大学・国際交流センター・
特任准教授 研究者番号：70250024

(4)研究分担者

小池 亜子 (KOIKE, Ako)
国土舘大学・政経学部・准教授
研究者番号：10439276

(5)研究分担者

鈴木 秀明 (SUZUKI, Hideaki)
目白大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10583958

(6)研究分担者

徳永 あかね (TOKUNAGA, Akane)
神田外語大学留学生別科・准教授
研究者番号：10360091

(7)研究分担者

中河 和子 (NAKAGAWA, Kazuko)
富山大学・医学薬学研究部・非常勤講師
研究者番号：00456401

(8)研究分担者

ボイクマン 総子 (BEUCKMANN,
Fusako)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50370995

(9)研究協力者

遠藤 藍子 (ENDO, Ranko)

(10)研究協力者

菅谷 有子 (SUGAYA, Yuko)

(11)研究協力者

田中 和美 (TANAKA, Kazumi)

(12)研究協力者

古川 嘉子 (FURUKAWA, Yoshiko)

(13)研究協力者

松尾 憲暁 (MATSUO, Noriaki)

【注】

i これまで日本語教師養成における指針であった「日本語教育のための教員養成について」(平成12年 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議)が18年ぶりに改訂され、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」(平成30年3月2日 文化審議会国語分科会)として公開された。ここでは、「言語教育法・実習」区分の必須の教育内容として「(21)日本語教育プログラムの理解と実践」が追加された。また、日本語教師【中堅】研修や、日本語教育コーディネーター【地域日本語教育コーディネーター】・同【主任教員】研修における研修内容に、プログラムデザインやマネジメントに関する項目が加えられた。

ii このバージョン以降、このテンプレートについては、もっと簡単に記入ができるものにしたり、ビジネス日本語や地域での日本語支援活動などにカスタマイズしたりするために、いろいろなバージョンを作ってきた。本研究で開発したさまざまなバージョンのテンプレートは、以下のサイトからダウンロードすることが可能である。

http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/project/Pro_Ken/index.html

iii 「日本語教育プログラム論構築に向けてのテンプレート活用方法に関する討論会」(金沢工業大学 虎の門キャンパス 13階 1301 講義室、平成28年12月10日)

iv 日本語議連にほんごぷらっと

<http://www.nihongoplant.org/>

v 佐々木倫子・江副隆秀・加藤早苗・山本弘子「日本語学校の質的保障—混乱からの脱却」2018年度日本語教育学会春季大会パネルセッション(2018年5月26日：東京外国語大学)